

タルマイスゲの新産地

山崎 惇・高橋 秀男

A. Yamazaki and H. Takahashi: New locality of *Carex buxbaumii* Wahlenb.

1. はじめに

筆者の一人山崎は明治大学考古学研究所主催による矢出川遊跡群総合調査の一環として、1981年に植生調査を実施した。調査地域内の矢出川沿いにヌマガヤの大きな湿原が2ヶ所ある。これらの湿原の一部で見られない*Carex*の一種を見出し、高橋と協同で調べた結果、タルマイスゲ *Carex buxbaumii* Wahlenb. であることが判明したので、その生育地と形態について報告したい。本種は全世界に点在分布し、日本では北海道の平地の湿原に見られ、長野県は勿論本州でも新記録となるものであろう。

2. 分布地点と環境

発見地は長野県南佐久郡南牧村野辺山（の通称三軒屋および三沢地籍）である。野辺山は千曲川の最上

（八ヶ岳）から東へ流れているのが矢出川で、その兩岸の100～300mの間は周囲の村落の共有地となっているため、まだ開拓されず、自然が残されている地域である。そこは幅の広い凹地となっていて、ベルト状に湿原地帯を形成している。なお年間の雨量は1400mm前後である（図1）。

3. 生育地の植生概観

矢出川流域は落差の少ない平坦地を何本もの小川が蛇行する湿地帯であり、ハンノキ林やズミ林を中心とした湿性植生が発達している。これらの林の外側に湿性草原が展開し、三軒屋と三沢の北にヌマガヤを主体とした中間湿原が見られる。

三軒屋 標高1345m、広さ50×100m位の湿原である。ヌマガヤの他にコマツカサススキ、オニスゲ、ゴウソ、シカクイなどのスゲ類を中心にクサレダマ、エゾシロネ、ヒメシロネ、ウメバチソウなどの湿性広葉草本の混生した草原を形成している。この地方では比較的珍しいサギスゲやミズトシロなど僅かではあるが生育している。この湿原中の地下水の高い地表水のある地域の一部に、ヌマガヤに混じってタルマイスゲが散生している。

三沢 標高1335m。広さ200×250mの湿原である。ヌマガヤが主体であることは変わらないが、スゲ類は割合少なく、クサレダマ、アサマフウロ、チダケサシ、ヒメヒダなどが、被度は低いが湿原全体に分布している。三軒屋より地下水がやや低く、やや乾燥気味の湿原である。タルマイスゲはこの中の最も湿潤な部分に生育している。

4. 形態

本種については大井次三郎（1936, 1975）、秋山茂雄（1955）に記載や図があるので、ここでは野辺山産について形態の記述をしておきたい。

根茎は横走し、黒褐色の鱗片葉に包まれる。稈は高さ40～60cm、鋭三稜形で上部はざらつき、基部につく鞘は葉身はなく赤褐色である。葉は幅2～3mm、辺縁はざらつき、裏面は粉状突起を密生する。

葉の長さは開花期にはほぼ稈と同長であるが、夏の葉は伸長し、幅は5mm位となり、長さは80cm以上にも達する。

小穂は3～5個、下方の一個が少し離れてつくほ

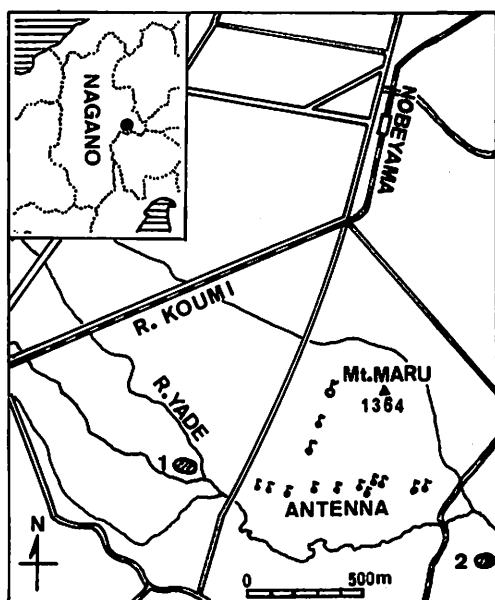


図1 タルマイスゲ *Carex buxbaumii* の分布地点（斜線）。1は三軒屋、2は三沢。

流部で、八ヶ岳の東山麓に展開する広大な高原である。標高1300～1400mの高冷地で、高原野菜では全国一の生産高を誇っている。この高原の南部を西

かは皆接近してつき、無梗である。最下の苞葉は長さ2~6cmで、花序とはほぼ同長かもしくは短い。頂小穂は雌雄性で下方に僅かに雄花がつき、側小穂は雌性で直立し、長だ円形で長さ1.2~2cmある。雄花の鱗片は広ひ針形で長さ5~7mm、雌花の鱗片は卵形で短芒があり、芒を含めて長さ4mm 内外(芒は0.5~1mm)、暗紫褐色をおびる。果胞は鱗片よりも短かく、少し幅は広く果胞が少しはみ出して見える。形はだ円形で長さ3mm、密に細突起があり、少し扁平で約7脈がある。先端はやや急に狭まって短嘴をなし、口部に2小歯がある。柱頭は3個でやや太い。

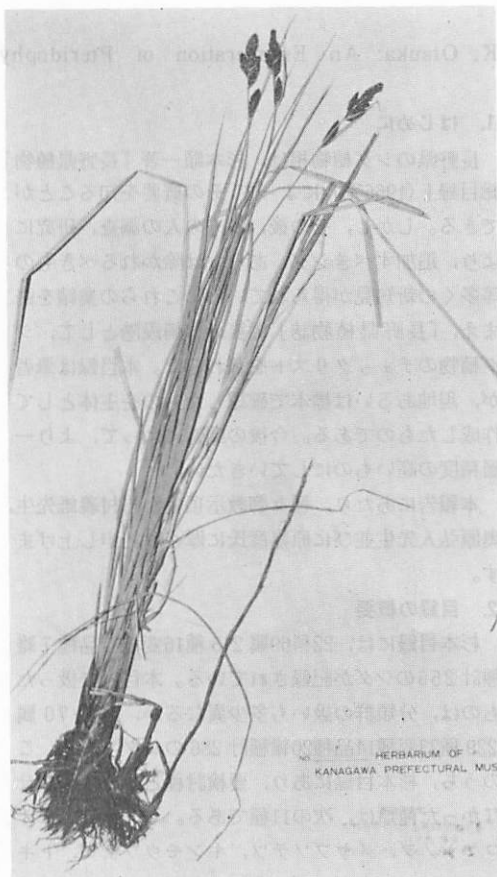
ヨーロッパや北米に若干の変異が知られるが、日本産は *Carex buxbaumii* そのものに含まれるものであろう。類似種には霧ヶ峰などに分布するヌマクロボスゲ(シラカラスゲ) *Carex meyeriana* Kunth がある。小穂が無梗である点で似ているが、ヌマクロボスゲは叢生して匍枝を欠き、頂小穂は雄性、雌花の鱗片は鈍頭で芒はない。

文献

- Kükenthal, G. 1909 Cyperaceae—Caricoideae.
Pfl. —reich. 38: 393—394
Ohwi, J. 1936 Cyperaceae Japonicae. 1: 324.
Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ. Ser.
Vol. XI, No. 5
秋山茂雄 1955 極東産スゲ属植物。110—111
Pe. 91 北海道大学。
Hultén, E. 1968 Flora of Alaska and
Neighboring Territories. 257.
大井次郎 1975 日本植物誌 顕花篇。260,

至文堂。

De Filips, R. A. 1980 Flora Europaeae. Vol. 5:
317—319.



タルミスゲ *Carex buxbaumii* Wahlenb.

〔新刊紹介〕 信州大学環境問題研究教育懇談会編
「信州の自然環境モニタリングと環境科学の総合化
に関する研究」昭和56年度研究報告 B 5判, 92頁,
1982年3月発行。

環境問題に関心をもつ28名の信州大学教官により
組織された信州大学環境問題研究教育懇談会の4年
間にわたる研究の報告書である。すでに54年, 55年,
56年にも報告書が発行されており、本書で4冊目になる。

第1編の研究報告には14編の報文が収録されている。
水域に関しては、1. アオウキクサによる銅イ
オンとカドミウムイオンの吸収に及ぼすキレート剤、
アンモニウムイオン、硝酸イオンの濃度やpHの影響、
2. 諏訪湖の網生養鯉量と天然育成漁獲量、およ
びその出荷金額高の関係、3. 上高地のイワナと放

流魚の分布および産卵活動の観察、が報告されてい
る。陸上動物については、ネズミ類と食虫類の高地
適応を生息地の標高と繁殖様式、心室重量や血液の
性状の関係から検討したものと、山岳観光道路の開
発がホンシュウジカに与える影響を、糞塊数の経年
変化からみたものがある。植物に関しては、森林
の炭素貯蔵庫としての役割と、大気中のCO₂濃度調
節器としての役割が論じられ、また、植相調査から
その地域の環境評価を行う簡便な方法が提案されて
いる。植物生産力を地形条件・日射から推定し、評
価するためのモデルも提案されている。環境観など
については数編が収録されている。第2編の特別寄
稿「新しい水質クリテリア」では米国で1980年に
出された水質基準について紹介し、今後必要と考え
られる課題について言及している。(K. S.)